

奈良時代の阿弥陀信仰

伊藤 茂樹

はじめに

本稿では奈良時代の阿弥陀信仰を述べることを目的とする。日本浄土教の始まりは、天台浄土教に視点が置かれ、不断念仏や『往生要集』に焦点が当たるとする。しかし奈良時代、東大寺や法華寺では阿弥陀信仰が存在した。日本における阿弥陀信仰は飛鳥時代よりみえている。しかし、その信仰は諸仏の一つとしての信仰で阿弥陀のみの独立した信仰ではない。奈良時代も、弥勒信仰との混合的な要素が強いようであるが、奈良時代中期よりは、阿弥陀信仰が飛躍的に増える。しかし、そこには様々な問題も内在する。本稿ではそのような奈良時代の阿弥陀信仰について、まずは井上光貞氏、堀池春峰氏、大野達之助氏、藤島達朗氏等の研究を踏まえた上で概説的な内容を提示し、追善と願生という問題点。また奈良時代の浄土教と平安時代の浄土教の連続性を取りあげてみたい。

一、阿弥陀信仰のはじまり

日本における浄土信仰のはじまりは飛鳥時代という説が強い。聖徳太子の没後、橘夫人がおらせた天寿国曼荼羅繡帳は聖徳太子が往生した浄土が描かれている。それが、阿弥陀仏の浄土であるか否かについては、古来より諸説あるものの（家永、一九五〇）（大野、一九九七）（速水、一九七八）、浄土信仰は高句麗僧を中心に導入されていた可能性は認めうるものであろう（塚本、一九六九）。

日本仏教の浄土信仰を阿弥陀仏に限定するのであれば『日本書紀』にみえる慧隱の『無量寿経』講説がもっとも早いものといえる。『日本書紀』には、舒明十二年（六四〇）五月の条に「大設齋因請慧隱僧令説無量寿経」（『日本書紀』後篇、国史大系本、一八五頁）、また白雉三年（六五二）四月の条にも、内裏において無量寿経が講述された旨が記されている。日本仏教は、講経を重視するのであるが、その中で『無量寿経』が取り上げられたことは注目値する。

またこの時期について斉明四年（六五八）の観心寺阿弥陀仏像、斉明五年（六五九）の西琳寺阿弥陀仏像といった阿弥陀仏像の造立もみられる。また、白雉四年（六五三）五月に遣唐使にしたがって入唐した道昭が斉明七年（六六一）に帰国の際、『阿弥陀経』、『観無量寿経』、『安楽集』二巻、善導大師の『観経疏』『往生礼讃偈』『般舟讚』の三部を日本に将来し元興寺の禅院に収蔵した（中井真孝、一九九五）。阿弥陀信仰のはじまりは七世紀中頃が一つの契機であるといえよう。

慧隱、道昭によりもたらされた浄土教は、以後日本に定着し発展する。そしてその発展の契機は八世紀中頃にあ

る。次に奈良時代の阿弥陀信仰の概要をみてみたい。

二、奈良時代の阿弥陀信仰（一）光明皇后追善の阿弥陀信仰

古代の阿弥陀信仰はまだ独立した信仰として確立していない。四方浄土の一つとしてまだ独立した浄土となっていないこと（堀池、二〇〇四）や、また井上光貞氏（井上、一九七五、十二頁）の指摘にあるよう阿弥陀信仰と弥勒信仰が混在したかたちで展開している。

飛鳥・白鳳期においての浄土教は、釈迦、弥勒が中心的であり、その後の観音信仰の展開とともに、阿弥陀信仰が発展してくるというのが実態であり、八世紀半ば以降は、他の諸仏、菩薩に比べて阿弥陀仏の造像が圧倒的に多くなる。（井上、一九七五、九頁）

この時期に阿弥陀仏造像の隆盛がみえる契機は、光明皇后の信仰、または皇后滅後の追善に阿弥陀信仰が関わるころが大いであろう。天平宝字四年（七六〇）七月には

設皇太后七々齋於東大寺并京師諸小寺。其天下諸国。毎国奉造阿弥陀浄土画像。仍計国内見僧尼。写称讚浄土經。各於国分金光明寺礼拝供養

（『続日本記』国史大系本、二七三頁）

として、光明皇后滅後の追善として、東大寺を中心として御齋会が行われ、諸国ごとに浄土変相が造られ、国内の僧が『称讚浄土經』を写し礼拝供養したことが記される。また、翌年の六月（七六一）には、

設皇太后周忌齋於阿弥陀浄土院。其院者在法華寺内西南隅。為設忌齋所造也。其天下諸国、各於国分尼寺奉造

阿弥陀丈六像一軀、脇侍菩薩像二軀

〔続日本記〕 国史大系本、二七九頁

として、法華寺に阿弥陀浄土院を造り、ここで皇后の周忌の齋会を行い、諸国の国分尼寺に丈六阿弥陀仏像を造るという指示が出された。

浄土絵図、『称讃浄土經』の流布。また諸国の国分尼寺に丈六阿弥陀仏像が造立されるという事業は、地方に阿弥陀信仰を往生冥福の追善儀礼として流布させることに大いに貢献した。また光明皇后の追善に対しては、

於山階寺毎年皇太后忌日講梵網經捨京南田冊町以供其用又捨田十町於法華寺每年始自忌日一七日間請僧十人礼拜阿弥陀仏

〔続日本記〕 国史大系本、二七九頁

として、毎年山階寺で『梵網經』の講読を行い、法華寺では、光明皇后の忌日にあわせて浄行僧を集め、阿弥陀仏に礼拝を行うことが要請された。宮中御齋会は、「金光明最勝王經」の講読と吉祥悔過が行われるが、光明皇后追善の御齋会の場合、『梵網經』の講読と浄行僧による阿弥陀悔過が行われていたようである。

阿弥陀信仰は、光明皇后御齋会を機会として諸国の国分寺に広がっていった。阿弥陀信仰の展開の上で、この点は重要である。初期の阿弥陀信仰は、法華寺と光明皇后、法隆寺伝法堂と橘夫人、当麻寺と中将姫、広隆寺と永原御息所といった、女性と関係のある伝承が多く残るのであるが、これらも光明皇后御齋会との関連性を指摘する意見もある。(中野玄三、一九八二、一三七頁) 観音悔過、また薬師悔過が、諸国の国分寺を中心に全国的に広まっていったのと同様に、阿弥陀信仰も皇后追善の御齋会を契機として全国に展開することになる。

先に述べたように光明皇后の追善事業は浄土絵図、丈六阿弥陀如来像の造立、また『称讃浄土經』の書写が指示されているが、これらの時期に出来た、あるいは影響下の中で現存する美術品は残っている。阿弥陀仏像については、石田茂作氏が奈良時代の阿弥陀仏像の特異点について、①当麻曼荼羅中尊や広隆寺の仏像、あるいは唐招提寺

の推出像に見る如き説法印の弥陀が多くて後世の如く定印弥陀や来迎印弥陀は皆無②弥陀観音勢至の三尊仏が多い事③浄土変というものが非常に多い事、を指摘される（石田、一九三〇、一六八頁）。これらの仏像は、光明皇后御齋会の関わりが示唆されるが、特に阿弥陀仏像の特色として説法印の弥陀が多く占めることが注目される。奈良時代の説法印阿弥陀如来像の古例としては、法隆寺伝法堂西の間の乾漆阿弥陀如来座像、同東の間木心乾漆阿弥陀如来座像。および興福院木心乾漆阿弥陀如来座像があげられるが、やはり長岡龍作氏は特色として第一指と第四指を捻じる説法印の阿弥陀如来座像であったことを指摘する。これらは光明皇后御齋会阿弥陀像製作以後のかたちを伝えるものという（長岡、二〇二二、二七〇頁）

長岡氏は、光明皇后御齋会に際して造立された阿弥陀如来像には、画像と彫像の二通りがあり、それぞれが国分寺と国分尼寺に対となって存在したことを指摘され、また画像阿弥陀如来像は法会のための本尊であり、彫像阿弥陀如来像は、阿弥陀浄土院のような堂宇の本尊として造立されたこと、また坤宮官御齋会の画像阿弥陀像は規範的な図様として認識された可能性があり、長岡氏はそれを「光明皇后御齋会図様」と名付けて定義され、諸国において造られた画像、彫像の阿弥陀如来像は、同図様に基づいて画一的に製作された可能性について指摘されている。（長岡、二〇二二、二六八頁）これらについて中野聰氏は、奈良時代の阿弥陀仏造像について、研究史を踏まえ詳しくまとめている。（中野、二〇一三、「奈良時代阿弥陀如来像制作の意義」）

『称讚浄土経』についても、奈良時代に書写されたと思われる『称讚浄土経』が多数存在しており、これらが書写された背景については、やはり光明皇后七七忌供養が契機となっているようである（齋木涼子、二〇二二）。東大寺写経所においては、千八百巻の『称讚浄土経』書写が行われていたようである。この写経事業については、宮崎健司氏が詳細な分析を試みているが（宮崎健司、二〇〇六）、天平宝字四年（七六〇）七月十一日の日付を持つ写経

所解案によれば、六月七日の宣により同経千八百卷の書写が命じられたことが示され、またこの事業のために「写称讚浄土経所」が設けられている。六月七日の宣といえ、光明皇后の崩御が六月七日であるため、即日準備が始められたことがわかる。また写経事業の政治的背景の考察については、山本幸男氏は企画者を藤原仲麻呂とされ、写経事業の政治的背景を考察される（山本、一九八八）。

浄土変については、天平宝字四年（七六〇）東寺阿弥陀浄土図、天平宝字五年（七六一）興福寺東院阿弥陀浄土変、天平六年（七三四）石山院阿弥陀浄土変の存在が確認され、これらはやはり光明皇后御齋会との関連で造立されたと考えられる。極楽浄土変いわゆる浄土曼荼羅は、奈良時代に多く製作されたようであるが、現代にも伝わる曼荼羅として天平宝字七年（七六三）作の当麻曼荼羅と元興寺智光の感得した智光曼荼羅、清海曼荼羅がある。これらも光明皇后の追善との関連を探るべきであろう。

当麻曼荼羅の図様は敦煌から多数発見されている。（石田茂作、一九三〇、一六八頁）智光曼荼羅、当麻曼荼羅、清海曼荼羅の浄土三曼荼羅については、『浄土曼荼羅―極楽浄土と来迎のロマン―』（一九八三）、元興寺文化座研究所編『日本浄土曼荼羅の研究』（一九八七）。また智光曼荼羅については、元興寺文化財研究所『智光曼荼羅』（一九六九）、当麻曼荼羅については、『当麻寺―極楽浄土へのあこがれ―』（二〇一三）、『糸のみほとけ―国宝綴織當麻曼荼羅と繡仏―』（二〇一八）、『中将姫と当麻曼荼羅』（二〇二二）にその詳細が述べられている。

このように光明皇后追善御齋会において、阿弥陀信仰にまつわる関連の美術が造られ、それらをもとにこの時代の浄土教の特質を分析する研究が多くある。

二、奈良時代の阿弥陀信仰（二）阿弥陀悔過

阿弥陀信仰が広まる契機は、奈良時代中頃から顕著になるのであるが、阿弥陀仏の実際の修法としては阿弥陀悔過が奉修されていた。

阿弥陀悔過が東大寺阿弥陀堂で行われていたことは、東大寺文書神護景雲元年（七六七）の「阿弥陀悔過資財帳」によって明らかにされる。竹居明男氏は『阿弥陀悔過料資財帳』を丹念に読み込み、奈良時代の阿弥陀悔過について詳細な分析を加えている。（竹居、一九九八）『阿弥陀悔過料資財帳』には悔過を行う必要な品目が記されるのであるが、仏像として阿弥陀三尊像、音声菩薩像、羅漢像、また浄土三部経や『華嚴経』『法華経』『梵網経』とそれぞれの注疏。阿弥陀浄土変、山水鳥獸、菩薩、花等を描いた厨子。その他にも、琵琶、琴、笙等の楽器が列記されている。經典読誦や音楽的な法要が修され、また極楽浄土を連想させる厨子等の絵画からみても、平安浄土教にみられる浄土信仰と異なるとはいえ、後の阿弥陀信仰の萌芽として認めることは可能であろう。東大寺で行われる阿弥陀悔過は、地方へも伝播され、多度神宮寺でも行われていた。

阿弥陀悔過は、神護景雲元年（七〇四）、天平十三年（七四二）東大寺で行われた例がみられるが、やがて多度神宮寺（『多度神宮寺縁起並資財帳』）においても行われており、興福寺法相宗の昌海には『阿弥陀悔過』という著作もみえている。東大寺を発起点として南都系の諸寺では、阿弥陀悔過が行われていたのであろう。

先の『資財帳』からみて、阿弥陀悔過には、經典には浄土三部経が記されるものの、『華嚴経』、『梵網経』、といった經典も安置していることが確認される。そもそも、悔過行そのものが、阿弥陀仏以外にも、十一面観音、薬師

如来を本尊として行うケースが多く、その儀式、差定もほとんど同型式であったという指摘があり（井上、一九七五、三六頁）、阿弥陀悔過も阿弥陀仏特有の行法とは言えない。密教儀礼的な要素が強く、浄土三部経がみえるとはいえ、善導の本願念仏の価値観とは異なるものと考えられる。

さて阿弥陀悔過においても、行法そのものに浄土願生という要素があるのか否かについては問題となっている。井上光貞氏は、阿弥陀悔過に浄土願生という側面は全く認めない立場にある（井上、一九七五）。この点、奈良時代後期には興味深い史料が残されている。

故石田女王一切経等施入願文

故從五位上石田女王凶仏像一切経等並水田入寺願文

夫極樂淨刹、量等虚空、衆聖登真之勝境。淨過三界、群有入道之英縁、金池帶八德而流芳、玉樹引七覺以宣法、爰釈迦能仁、垂迹此土、將率四生、弥陀種覺、馭彼淨域、引導三有、故能聞德号者則滅重障、念相好者、無不往生、是以故女王弘發誓願、近報四恩、遠期菩提、奉造阿弥陀觀音勢至等像、奉写一切経等、儲備水田六十町、成往生之因、而未果志、早移淨方者也 今長谷等、歛先遺跡、欲繼後業、其仏像等、永奉納寺、請次第僧、誦經悔過、奉助 先靈、仰願、以此功德、弘奉資生、四恩、世々六親、永出三界六道、速往生極樂淨土、修六度万行之因、証菩提涅槃之果、普及法界、共成覺道

延暦十七年八月廿六日 從五位下文室真人「長谷」

男「宮守」

「広吉」

「長主」

〔平安遺文〕一卷、九頁、一八号

ここには相好を念ずるといふ観想念仏的な側面もみえ、個人の浄土願生という側面もみえている。追善重視の奈良時代の阿弥陀信仰に個人の願生という萌芽を確認することは出来る。奈良時代後期に、平安期に繋がる浄土願生の信仰がみえることは興味深い。もつとも本史料の分析においても井上氏は追善を重視して、浄土願生は一切認めない(井上、一九七五、二〇頁)。

初期の阿弥陀信仰が悔過行のなかで醸成されてきたことは重要であり、今後も諸仏悔過との関連や時代的な変遷も探る必要があるであろう。

三、教学研究

奈良時代、すでに浄土三部経は伝来していた。またそれらの異訳である『無量清浄平等覚経』、『称讚浄土摂受経』。他にも『阿弥陀咒経』『阿弥陀仏偈経』『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』といった阿弥陀仏に関連する経典も伝来している。これら浄土教に関連する注釈書もかなり伝わっている(石田、一九三〇、一六〇頁)。

元暁 『両卷無量寿経宗要』 一卷

靖邁 『両卷無量寿経疏』 一卷

義寂 『両卷無量寿経疏』 三卷

玄一 『両卷無量寿経記』 一卷

『両卷無量寿経剛目』

『両卷経字釈』一卷

法位師『無量寿経義疏』二卷

善導『観無量寿経疏』四卷

善導『依観経等明般舟三昧往生讚経』一卷

『解讀阿弥陀経』一卷

靖邁『称讚浄土仏撰受経疏』三卷

元暁『般舟三昧経略義』一卷

『往生論私記』一卷

懐感『釈浄土群疑』一卷

なかでも注目すべきは善導の『観経疏』がすでに伝来していることである。石田茂作氏は、正倉院文書に『観経疏』がみえていることを指摘され、奈良時代の浄土教に善導が中心的な位置にあることを指摘される(石田、一九三〇)。奈良時代すでに道綽、善導の著作が伝来していたことは興味深い。ただし、奈良時代の浄土教が善導を重視という見解は、当麻曼荼羅の影響を除外しなければ無いであろう。阿弥陀悔過に善導の影響はみえず、また当該期の学者の研究においても善導が殊更重視されている形跡はない。

白鳳期より道昭により浄土経典が将来され、以後も様々な浄土経典が伝来するようであるが、奈良時代には官立の写経所でこれらの典籍が書写されることになった。そしてそれら経典の研究は日本仏教において重要であった。飛鳥、奈良時代の浄土教は、読誦経典については『阿弥陀経』が盛行であり、教学の中心には『無量寿経』があると指摘される(石田、一九六五)(井上、一九七五)。教学の中枢にある『無量寿経』については以下の注釈書が散見

される。

・善珠 『無量寿経賛鈔』

・善珠 『無量寿経註字釈』

・智憬 『無量寿経指事私記』

・智憬 『無量寿経宗要指事』

・智光 『無量寿経論釈』 ↓逸文あり

残念ながらすべて散逸しているが、智光の『無量寿経論釈』については平安、鎌倉時代の典籍に佚文があり、復元作業が試みられている（戸松、一九三八）（恵谷、一九七六b）（藤堂、一九六九）（服部、一九八六）。

凝然の『浄土法門源流章』では、「諸宗流転浄土教観不為別宗各随自宗解釈法義昔元興寺智光礼光各弘三論兼通浄教法相昌海欣楽安養撰西方念仏集一卷並阿弥陀悔過」（『浄全』十五、五九〇頁）とするように、浄土教は独立した宗派ではなく、それぞれの宗派に属し、その宗の解釈に随いながら浄土教を解釈するという。これは法然以前の浄土教のあり方であって、浄土教として独立した宗派は存在しない。元興寺の智光・礼光は三論宗、昌海も法相宗に属し、その立場を堅持しながら浄土教を学ぶ姿勢をもつという。以下、奈良時代の学僧における浄土教をとりあげてみたい。

学僧について

（A）善珠、智憬

智憬（八世紀頃）は幼少の頃、良弁の弟子となり、審詳にも師事した初期の東大寺の華嚴学者であった。智憬も

浄土教の著述がみえており、永超（二〇一四〜一〇九五）『東域伝灯目録』には、「無量寿経宗要指事一卷、無量寿経指事私記一卷」の二部、また『長西録』には『無量寿経私記』があげられている。現在散逸しているため、詳細は不明であるが、『東域伝灯目録』が、元暁の『両卷無量寿経宗要』に続いて智憬の著述を掲載しているところから、同書の註釈書であると考えられている。

法然上人は、『阿弥陀経釈』に往生極楽の旨を説くのは浄土三部経に過ぎるものは無いとして、その証拠に善導『観経疏』、天台『十疑論』、慈恩大師『西方要決』、迦才『浄土論』、智景『疏文』、恵心『往生要集』の六つをあげて（『昭法全』一三〇頁）、五番目に『智景疏文』をあげている。ただし、ここに書く内容は迦才と同意であるとして詳細は略している。智憬『疏文』がどの書物をさすのか不明であるが、法然が智憬の著作を読み迦才と同意としたことは興味深い。

なお智憬の浄土教については、愛宕邦康氏が、『遊心安楽道』の著者を智憬であるという興味深い説を提示されている。（愛宕、二〇〇六）智憬によって撰述された二種の『而卷無量寿経宗要』の註釈である『無量寿経宗要指事』と『無量寿経指事私記』のいずれか一方が、『往生要集』から『安養集』撰述時までの期間（九八五〜一〇七〇）の叡山で便宜的に『遊心安楽道』と仮題されたと指摘する。

善珠（七二三―七九七）については、大和国の出身であり、興福寺の玄昉より法相教学、唯識因明を学び、七七年に大和秋篠寺を建立した。七九四年九月には、最澄の招きにより根本中堂の落慶供養の導師を勤め、皇太子安殿親王の病を癒やし、その功により僧正に任じられた。

興福寺を代表する学者である善珠は、慈恩大師窺基や慧照の著述に対する様々な注釈書がみられるが、浄土教に

ついでにの信仰もあつたようで、『唯識義灯増明記』には、「共生西方安楽国」第一卷（『大正蔵』六五卷、三二七頁）、
 「以之為因必生西方共得相見焉」第三卷（『大正蔵』六五卷、三七〇頁）、「増明本旨為期西方、共往西方於得相見」第
 四卷終（『大正蔵』六五卷、四〇二頁）の記述がみえる（藤島、一九六九 a、b）。

善珠の著述については、『無量寿経賛鈔』、『無量寿経註字釈』、『無量寿経註字釈』がみられる。『無量寿経註字釈』については、『長
 西録』にその名が確認され、井上光貞氏は『両卷経字釈』との関連が指摘されている（井上、一九七五、七五頁）。
 『無量寿経賛鈔』については、『東域伝灯目録』にその名が見えており、新羅憬興の『無量寿経連義述文贊』の副註
 とみられている。

憬興、善珠ともに新羅浄土教の影響を強く受けていることは興味深いが、著書も逸文もなく内容を伺うことは出
 来ない。

(B) 智光

智光（七〇七―七八〇頃）は、河内国安宿部郡稲葉村の生まれで、智蔵、または道滋を師とする元興寺三論の学
 者である。浄土教についても詳しく、『無量寿経論釈』『観無量寿経疏』『四十八願釈』といった著作があつたこと
 がわかっている。

奈良時代の浄土教について、学術的な史料で唯一残るのは、智光の『無量寿経論釈』である。『無量寿経論釈』
 そのものは散逸しているものの逸文が残っており、まずは高西賢正氏が、諸書にみえる佚文を集成され（高西、一
 九二六 a、b）、ついで戸松憲千代氏が佚文の集成と校訂を行った（戸松、一九三八）。

のちに恵谷隆戒氏は大津坂本の西教寺での源隆国『安養集』を発見され、『安養集』に長文の『無量寿経論釈』

が三十五箇所にわたり引用されることを知り、ここから鎌倉時代の浄土教典籍に引用される逸文まで集成して『無量寿経論釈』が復元されることになった。この復元本は、第三巻がほとんど完全に近いまでに復元され、第一、二の両巻が半分くらいの復元に至るものとなった(恵谷、一九七六b)。また藤堂恭俊氏は、これらの資料の再整理を行った成果を発表された(『智光曼荼羅』一九六九、史料編「無量寿経論釈逸文集成」)。その後、服部純雄氏は、逸文の重複する箇所に校異をなし、戸松、恵谷、藤堂氏の発表成果の所在位置を記すかたちで、あらためて復元資料を提示された。(服部、一九八六) これらの成果から、智光の浄土教学をかかなりの部分で探ることは可能となった。

『無量寿経論釈』は、五巻よりなる世親の浄土論の注釈書である。巻一が偈頌の釈、巻二～五は長行の釈である。まず「論曰」と『浄土論』の文を挙げ、ついで「釈曰」と註釈してゆく。釈文の前には曇鸞の『往生論註』の文、またそれに手を加えた文が置かれる(梯、二〇〇八、三〇頁) 世親の『往生論』を『往生論註』を中心として諸経論釈を参照して解釈したもので、『無量寿経論釈』が観想重視であることが示唆される。智光の念仏観を知る上で、一心専念を釈す以下の文がある。

念仏有二、一者心念、二者口念、心念亦二、念仏色身、謂八万四千相等是、念仏智身、謂大悲力等也、其口念者、若心無力、將口念仏、令心不乱

念仏に心念と口念があり、心念については八万四千の相好の色身と大悲力等の智身を念ずるのであり、口念は、それに適わないものが口称によるという。これについて、智光は迦才の『浄土論』を踏襲したということが指摘される(戸松、一九三七a)が、先の法然の『阿弥陀経釈』に、同時代の智懐の疏文の内容が迦才と同じと法然が評したのと同じく、奈良時代の学匠の浄土教は、迦才による影響が強かったことが示唆される。

奈良時代、隋の道綽、唐の善導、靖邁、新羅の元暉、義寂、法位等、様々な浄土教典籍が輸入され書写される中

で、曇鸞・迦才という流れが、奈良時代の学匠の浄土教に影響をあたえることは、今後の研究で検討される重要な課題といえるであろう。

四、追善と願生

日本古代の浄土教についての研究は、井上光貞氏の『日本浄土教成立史の研究』がいまだ重要な位置を占めている。井上氏の研究は、阿弥陀仏像、浄土変相図、写経の奥書という膨大な史料の蓄積から考察されている点に特徴があり、これ以後の研究は、ここに見える史料、論点を土台に議論を展開しており、現在に至るまで研究価値の失うものではない。

井上氏の視点は多岐に及ぶものの、最大の論点は、奈良時代の浄土教に個人の願生信仰を認めるか否かの点にある。奈良時代の阿弥陀信仰は、

極楽浄土は自己の往生すべきところではなくて、故人の行くべきところ、阿弥陀仏は救済者や観想の対象ではなくて、故人の冥福のための哀訴の対象であったのである。
(井上、一九七五、二五頁)

死者の世界は清浄至福の極楽浄土であって、その至福の世界に往生すべく、故人の忌 日ごとに造像・造堂・写経・燃灯などをおこなうべきものとされた
(井上、一九七五、二六頁)

つまり、奈良時代の阿弥陀信仰は亡者追善に過ぎない古代の呪術的信仰の範疇にあるという説である。中野聡氏

が指摘するように、井上氏に先行する大屋徳城氏（一九三七）、松本文三郎氏（一九四三）の研究には、奈良時代の阿弥陀信仰は自己の浄土往生を祈る信仰であったとの見方が示されている（中野、二〇一三、三四頁）。膨大な史料を駆使し圧倒的な説得力を持つ井上氏の説は、以後、大きな影響を与えており、藤島達朗氏（一九六九）、堀池春峰氏（二〇〇四）、村山修一氏（一九六六）、大野達之助氏（一九九七）、速水侑氏（一九七八）といった研究においては、それぞれ批判や調整はあるものの、その見解を受け入れた上で叙述されている。また美術史、建築史といった分野の研究者にまで影響をあたえている。阿弥陀信仰は古代的であり、呪術的な要素を多分に含むという井上説は、現在も通説的な位置にあるといつて良いであろう。

ただし井上説は、様々な問題提起を引き起こしたことも事実であり、もつとも盛んな議論となったのは、法華寺阿弥陀浄土院の設立であろう。その論点は歴史、建築史、美術史といったそれぞれの研究者から意見が提起されている。法華寺阿弥陀堂の造立が、光明皇后生前の発願であるという福山敏男氏の見解（福山、一九八〇）、それに反する井上光貞氏の説がある（井上、一九七五）。

井上氏の見解は、法華寺阿弥陀浄土院造営の目的について、①光明皇太后が自己の往生のために阿弥陀堂を計画しそれが崩御と共にたまたま追善の堂舎に転用された②光明皇太后は他の目的の堂舎を計画しその崩御によって何人かがこれを追善の堂舎にしたことを意味する、とした二説を提示されたが、このうち①にある説は採用せず②の説に立脚された。このことは、法華寺浄土堂を後世の阿弥陀堂の先駆として、道長の法成寺や平等院のような貴族の念仏生活のための堂舎の先蹤とする福山説に対して、あくまでも追善的阿弥陀信仰を背景としたものであった。福山、井上説を検討する後続の研究は多くあるが、それについては、中野聡氏の研究史（中野、二〇一三、序論「上代阿弥陀信仰と造像をめぐる先行研究」）を参照していただきたい。

さて、呪術的な追善信仰にのみ阿弥陀信仰の本質を認める井上説には、他にも批判が提出されており、代表的なものとして重松明久氏、竹居明男氏の研究がある。これらの反論はやはり個人の願生信仰があるか否かである。

重松氏の批判は、六五九年造立の西琳寺阿弥陀佛像銘文における「法蔵比丘四十八願、三輩往生是以書直大阿斯高君子支弥高首修行仏法草創西琳寺」とある一文に着目し、本像は『無量寿経』を想定して造像されており、『無量寿経』には「以此廻向願生彼国」とあることから「造像者を含めて現身の者の往生に兼ねて七世父母や広く一般人の追福が願われたものと解すべき」（重松、一九六四、二三頁）として、発願者自身の往生が願われていることを主張された。他にも、白雉五年（六五五）釈迦造像銘（『寧楽遺文』九六三頁）、法隆寺釈迦三尊造像銘（『寧楽遺文』九六二頁）、東大寺大仏殿曼荼羅織銘（『寧楽遺文』九八二頁）、天平十七（七四五）年『大般若波羅密多経』（『寧楽遺文』六一〇頁）等の史料を根拠に、古代阿弥陀信仰においても発願者自身の往生が願われていることを主張された。

竹居明男氏については、東大寺阿弥陀悔過を取り上げ、阿弥陀悔過の性質を分析するなか、井上氏が東大寺阿弥陀悔過を亡者追善の法会として位置づけた井上説を批判した。竹居説は、阿弥陀悔過は、修する側の人間は自己の罪への懺悔を通じて福利を願う法会であり浄土願生を認めるものであるが、そこには阿弥陀悔過独自の特殊性も含まれているとする。それについては三点あり、①東大寺阿弥陀堂には、浄土三部経が完備されている。②本尊として『東大寺阿弥陀資財帳』には、吉祥悔過、十一面悔過、先手千眼悔過のように、単独の仏像本尊ではなく、阿弥陀三尊、およびその他の群像や荘嚴が一体となって形成する立体的な阿弥陀浄土の造形であったこと③また笙、笛といった楽器類も完備されている点から、他の奈良諸寺に伝わる悔過法会にはそのような要素がない、とする。

このような竹居説は、東大寺阿弥陀悔過が平安期に繋がる念仏（観想念仏）の様相をすでに具備していたことあり、後世の阿弥陀堂と同系列のものであるという見解にある福山敏男の説を補強するもので、東大寺阿弥陀堂と

後世の阿弥陀堂とは同系統のもので無いとする井上説への批判である。また、井上説がいずれも時代の降った法会次第を論拠としていることも問題として指摘される。

竹居氏の批判は、井上説への優れた批判として評価する見解もあるが（中野、二〇一三、九七頁）、竹居説は、資財帳に浄土三部経がみえることを個人の願生の論拠とする。しかし、阿弥陀悔過の独自性が浄土三部経に集約されるということは無い。また三部経の重要性を主張した善導や法然の浄土教との関連にも言及すべきであるが、ここには全く述べておられない。東大寺阿弥陀堂が立体的な阿弥陀浄土の造形となっている点についても、すでに新薬師寺九間仏殿の群像は立体的な大規模な群像の配置にある（『延暦僧録』）。竹居説が東大寺阿弥陀堂に観想念仏の萌芽を見取り、平安期の浄土教の先蹤とする説は説得力があるが、井上説の批判として適切に成り立っているとはいえない。また悔過行が持つ鎮護国家的な要素が個人願生とどのように関連しているかについて説明はない。堅牢な井上説を実証的に乗り越えるには多くの問題が内在していると云わざるを得ないであろう。

梯信晁氏は、智光、智懐、善珠というそれぞれの学派を代表する学匠たちが、八世紀半ばという時期に阿弥陀仏に関連する教理研究に取り組み始めたのは、単なる偶然でなく彼らを浄土教研究に向かわせる社会的な要請があったと考えるべきである、という指摘をされる（梯、二〇〇八、六二頁）。確かに八世紀半ばに以降に書写された経論の奥書には自身の往生極楽を願う記述を確認することは出来るし、智光の『無量寿経論釈』は、「心念・口称」の念仏をあげ、口念は心念の能力に欠ける者が補助的に用いる手段であるとして、後の平安浄土教の先蹤と言える称名念仏の意義が提示されている。ここにみえる浄土教はあきらかに自身の往生を前提とするものである。

さて浄土教の追善・願生説には、平雅行氏が的確な指摘を行っている（平、一九九二、六二頁）。平氏は、九世紀後半から十世紀後半に至る一世紀ほどの時期を、浄土教発達史の画期をなす時代とみて、死霊鎮魂の念仏と真言が

登場し発達することに注目され、自己の浄土願生が、天皇家から貴族、民衆にまで広まり、日課念仏が都市民の日常生活内部に定着した事実を指摘され、この時期に新たな浄土願生の動きが始まることを指摘された。

ただし、平説は撰関期の分析に重点があるため、奈良時代の阿弥陀信仰にまで言及されていない。多分野に大きな影響をもたらした古代浄土教の井上説については、今後も様々な角度から検証され、その社会的要因を追求すべきであると思う。

五、浄土教信仰の展開——奈良時代から平安時代へ——

平雅行氏が指摘する、浄土教発達史の画期である九世紀後半から十世紀後半は、浄土願生が天皇家から民衆層にまで広まるのであるが、この頃より比叡山延暦寺では円仁が中国五台山より将来した五会念仏が、四種三昧の常行三昧を行うための堂舎である常行三昧堂において常行三昧として行われることになった。比叡山常行三昧流の念仏は、不断念仏と称されるものであるが、その始まりは、円仁の死後、貞観七（八六五）年とされ〔叡岳要記〕、以後、日本各地には常行三昧堂が建立され、各地で不断念仏が実修されることになった。

堀池春峰氏は光明皇后崩御に基づく阿弥陀信仰が、平安時代の浄土教として成長していくことを指摘された（堀池、二〇〇四）が、法華寺浄土院を中心として発展した奈良時代の阿弥陀信仰は、平安期の天台浄土教と無関係ではなく、不断念仏の伸張は、光明皇后追善における法華寺浄土院の阿弥陀信仰をもとに展開していく。かつて筆者はこのことについて「不断念仏の受容背景」（伊藤、二〇一五）という論考において言及しているので参照いただき

たい。

奈良時代から平安・鎌倉という時代性に配慮しながら信仰の展開を論じる注目すべき研究として塚本善隆氏の「智光曼荼羅と極楽坊の庶民化」(塚本、一九六四)をあげたい。本稿には、奈良時代に出来た智光曼荼羅がどのような歴史を辿り、民間に受容されていたかについて詳細に論じられている

智光曼荼羅は、奈良時代、大陸の影響を受けて造立されたが、古代律令制度の崩壊とともに没落した寺院が、新たな生き残りをかけて再生策を模索する十世紀末頃、元興寺は智光曼荼羅に着目する。浄土教興隆の機運が盛り上がる京都、南都において曼荼羅には智光頼光説話が付与され、それが喧伝された。院政期には、智光曼荼羅は極楽坊に祀られ、地域住民によって百日念仏講が催される。鎌倉時代には七日念仏と形態は縮小化しながらも室町時代にまで引き継がれる。奈良時代の歴史的遺物である浄土変相図が、中世にどのような受容がもたらされたのか示す優れた論考である。半世紀前の論文であるが、幅広い文献資料を駆使して浄土教信仰の実態を論ずる塚本論文は、あらためて評価し直すべきであろう。

まとめ

奈良時代の浄土教研究には多くの蓄積がある。紙数の制約、筆者の力量不足から、多くの分野の研究を網羅出来ず不十分なものになってしまった。本稿の準備の際、関連する論文を収集すればするほど、井上光貞氏の『日本浄土教成立史の研究』の影響の大きさに気づかされた。教学・歴史の分野のみならず、建築史、美術史といった多方

面にまで大きな影響をあたえ続ける。実証的で堅実な研究は、分野・時代を超えて褪せることのない重みを持つ。膨大な史料を駆使しつつ精緻に論証をする井上氏の学説には、多くの批判があるものの、それを超えるにはまだまだ幅広い視点と実証的な積み重ねが必要である。古代浄土教の研究は、中世への見直しを含めて、今後も取り組むべき重要な分野なのである。

【参考文献】

- ・高西賢正 「智光の浄土論疏に就いて」(『仏教研究』七一一、一九二六a)
- ・高西賢正 「智光の浄土論疏に就いて」(『仏教研究』七一二、一九二六b)
- ・石田茂作 「写経より見たる奈良朝仏教の研究」(東洋書林、一九三〇)
- ・大屋徳城 『寧楽仏教史論』(東方文献刊行会、一九三七)
- ・戸松憲千代 「智光の浄土教思想について(上)」(『大谷学報』一八一、一九三七a)
- ・戸松憲千代 「智光の浄土教思想について(中)」(『大谷学報』一八四、一九三七b)
- ・戸松憲千代 「智光の浄土教思想について(下)」(『大谷学報』一九一、一九三八)
- ・藤原猶雪 「善導大師本具両疏弘伝の研究」(『日本仏教史研究』大東出版社、一九三八)
- ・戸松憲千代 「天親『浄土論』曇鸞『浄土論註』、智光『無量寿経論釈』三本対照表」(『大谷学報』一九一、一九三八b)
- ・戸松憲千代 「安養抄に引用せられたる『往生論疏』に就いて」(『仏教研究』三一、一九三九)
- ・戸松憲千代 「元興寺智光無量寿経論釈抄」(大谷派宗学院『宗学研究』二四、一九四二)
- ・松本文三郎 「天平時代の仏教」(朝日新聞社編『天平の文化(下)』朝日新聞社、一九四三)
- ・家永三郎 「聖徳太子の浄土」(『上代仏教思想史研究』目黒書店、一九五〇)

- ・石田充之『日本浄土教の研究』(百華苑、一九五二)
- ・石田充之『浄土教教理史』(平楽寺書店、サーラ叢書十五、一九六二)
- ・重松明久『日本浄土教成立過程の研究』(平楽寺書店、一九六四)
- ・塚本善隆『智光曼荼羅と極楽坊の庶民化』(五来重編『中世庶民信仰史料の研究―地上発見物篇』法蔵館、一九六四)
- ・村山修一『浄土教芸術と弥陀信仰』(至文堂、一九六六)
- ・元興寺佛教民俗資料刊行会編『智光曼荼羅』(学術出版界、一九六九)
- ・藤堂恭俊『智光の教学―無量寿経論釈逸文集成』(『智光曼荼羅』学術出版界、一九六九)
- ・石田充之『智光曼荼羅とその浄土教実践理念―浄土教教理史上よりみたる智光の教学並びに信仰』(『智光曼荼羅』学術出版会、一九六九)
- ・藤島達朗『奈良時代における弥陀信仰』(『日本浄土教史の研究』平楽寺書店、一九六九a)
- ・藤島達朗『智光浄土変(曼荼羅)と智光の浄土教』(『智光曼荼羅』学術出版会、一九六九b)
- ・塚本善隆『日本古代仏教の浄土教的受容』(『日本浄土教史の研究』平楽寺書店一九六九)
- ・井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、新訂版一九七五、初版一九五六)
- ・恵谷隆戒『元興寺智光の無量寿経論釈の研究』(同著『浄土教の新研究』山喜房仏書林、一九七六a)
- ・恵谷隆戒『智光の無量寿経論釈の復元について』(同著『浄土教の新研究』山喜房仏書林、一九七六b)
- ・速水侑『浄土信仰論』雄山閣、一九七八)
- ・福山敏男『奈良時代に於ける法華寺の造営』(同著『日本建築史の研究』初版は桑名文星堂、一九四三、のち綜芸社、一九八〇復刊)
- ・中野玄三『悔過の芸術』(法蔵館、一九八二)
- ・凶録『浄土曼荼羅―極楽浄土と来迎のロマン』(奈良国立博物館、一九八三)
- ・福山敏男『創立期の法華寺』(『寺院建築の研究』中、福山敏男著作集、一九八二、初出一九六八)

- ・服部純雄「智光撰『無量寿経論釈』稿（復元資料）」（『浄土宗学研究』一五／一六、一九八六）
- ・元興寺文化財研究所編『日本浄土曼荼羅の研究』（中央美術公論出版、一九八七）
- ・山本幸男「光明皇太后の藤原仲麻呂政権―周忌斎一切経書写事業の検討を通して―」（『古代史論集』塙書房、一九八八）
- ・平雅行「浄土教研究の課題」（同著『日本中世の社会と仏教』塙書房、一九九二、初出一九八八）
- ・中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」（同著『法然伝と浄土宗史の研究』一九九四、思文閣出版、初出一九八〇）
- ・大野達之助『上代の浄土教』（吉川弘文館、新装版一九九七、初版一九七二）
- ・竹居明男「奈良朝の阿弥陀悔過―東大寺蔵『阿弥陀悔過料資財帳』の一考察―」（同著『日本古代仏教の文化史』吉川弘文館、一九九八、初出一九七八）
- ・堀池春峰「奈良時代に於ける浄土思想」（同著『南都仏教史の研究遺芳篇』法蔵館、二〇〇四、初出一九六九）
- ・梯信暁『奈良・平安期浄土教展開論』（法蔵館、二〇〇六）
- ・宮崎健司「光明子七七日写経をめぐる一、二の問題」（同『日本古代の写経と社会』塙書房、二〇〇六、初出一九九六）
- ・愛宕邦康「『遊心安楽道』の実質的撰述者―東大寺智憬」（同著『遊心安楽道』と日本仏教』法蔵館、二〇〇六、初出一九九四）
- ・中野聰『奈良時代の阿弥陀如来像と浄土信仰』勉誠出版、二〇一三）
- ・図録「当麻寺―極楽浄土へのあこがれ―」（奈良国立博物館、二〇一三）
- ・齋木涼子「『称讃浄土経』書写と「中将姫願経」の展開」（図録『当麻寺―極楽浄土へのあこがれ―』、奈良国立博物館、二〇一三）
- ・伊藤茂樹「不断念仏の受容背景」（『融通念仏宗における信仰と教儀の邂逅』法蔵館、二〇一五）
- ・図録『糸のみほとけ―国宝綴織當麻曼荼羅と繡仏―』（奈良国立博物館、二〇一八）

- ・長岡龍作「阿弥陀図様の継承と再生―光明皇后御齊会阿弥陀如来像をめぐる―」（同著『仏教と造形―信仰から考える美術史』中央公論美術出版、二〇二一、初出二〇〇三）
- ・図録『中将姫と当麻曼荼羅―祈りが紡ぐ物語―』（奈良国立博物館、二〇二二）

キーワード 阿弥陀信仰、阿弥陀悔過、光明皇后、智光、追善